
Dialy

三毛音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i a l y

【Nコード】

N 4 5 2 9 0

【作者名】

三毛音

【あらすじ】

晴れると聞いていたのに、吹雪いているじゃないか。 猛吹雪の
山の上、力尽きて倒れた私を助けてくれたのは、真っ白な

前編

私は今、ここにいることをひどく後悔している。

目に映る色は空の黒と雪の白、その二色だけ。

強い風が私を横から殴り、冷たい雪を叩きつける。山の麓の民宿のおじさんは晴れだと言っていたのに……まあ、山の天気は変わりやすいというし、今ここで泣き言を言っても仕方がない。かまくらでも作って休んでも良いのだが、この気温では寝袋に包まっていたとしても死にかねない。それは今無理をして進んでも変わらないのだが、目的地はそう遠くはないはずだ。進んだほうが生存率が高いとふんで、寒さに耐え歩みを進める決意をした。

が、駄目だった。

二十分ほど歩いただけで、足が棒のようになってしまった。都会育ちの上に、慣れない雪道、それもこの猛吹雪だ、体力が続くはずもない。単純な誤算だった。

フリージャーナリストになって二年。大した記事も書けないまま、私は死んでしまうのか。まだ二十歳なのに、なにもしていないのに、あたりと雪の上でうつ伏せに倒れた私の頭の中は、後悔で支配されていた。

視界が霞んできた。いよいよもって終わりなんだな。そう思った、時だった。

氷のように いや、さらに冷たい何かが、私の腕を掴んだ。ぼんやりと目に何かが映る。白色と、肌色。誰か 大人の女性だということをはかるうじで判断できた が、私の腕を掴んでいる。遠のく意識の中、私は思ったのだ。

ああ、雪女が、私を迎えに来たな、と。

私の意識は、そこで途絶えた。

目が覚めてまず驚いたのは、目が覚めたことに、だった。

暗い部屋で、温かく、柔らかいものに挟まれている。布団だろうか。頭の中はまだぼんやりとしていて、思考がろくに働かない。疑問に思ったのは、私が生きているのかどうか、くらいだった。

ゆっくり上体を起こしてみる。右手に少しだけ痛みを感じるが、外傷はない。捻ったのだろうか。周りを見渡すと、石油ストーブのほのかな明かりが部屋を照らしていた。立ち上がり、電灯の紐を引っ張り明かりをつける。

最初に和室であることを認識する。年季の入っていそうな畳は所々擦れて、ぼろぼろになっている。障子にも数箇所、小さな穴が開いていた。部屋の隅には私のリュックサックも置いてあり、カメラとICレコーダーは無事かと心配して確認してみたが、いずれも壊れている様子はなかった。

私も荷物も無事。誰かが助けてくれたのだろうか、礼を言わなければ。

荷物を片しているとき、ぎし、ぎしと床が鳴るのが聞こえた。

「お目覚めになられたんですね」

女性の声が聞こえる。ぼんやりとした記憶の中で助けてくれた女性の声だろう、あれは雪女ではなかったのか。

「入ってもよろしいでしょうか」

「どうぞ」

「失礼します」

私が短く返すと、すっと障子が開き、声の主が姿を見せた。

その姿に、私は。

「……………」

思わず、息を呑んだ。ここは本当に、現実なのだろうか。私は本当に生きているのだろうか。また、その声の主は本当に雪女なのではないか。そう思うほど、その姿は浮世離れしていた。現実味がな

かった。私の稚拙な語彙能力では言い表せない雰囲気を持っていた。まず目に飛び込んできた、長く美しい　白髪。そして、水よりも透明感のある　実在しているとは思えないほど　白い肌。少しだけ蒼のかかった、白地の和服、白い帯。全てが白く、全てが美しく、全てに現実味のない、幻とも思える少女だった。見た感じは十三、四歳くらいなのだろうか。その雰囲気と、神々しささえ感じられる風貌で、もう少し上にも見える。

少女はくりつとした、黒というよりは藍色の瞳で私を見つめる。

「どうかなさいましたか？」

「あ、いや……なんでもない」

声にさえも同じ雰囲気がある。透き通っている、柔らかな、耳に入った瞬間には溶けて淡く消えてしまう。全てにおいて上手く形容することのできない、本当に不思議な少女だった。

「……私を助けてくれたのは、君か？」

少々無礼な気はしたが、恩人相手とはいえ子供に敬語を使うのは不思議な気がして、私は少女にそう尋ねた。

「はい、近くで倒れていらしたのを見つけたものでしたから」

少女は私の正面にちょこんと座り、まっすぐ私を見つめて言う。

正対してみると、少女のかもしれない出す雰囲気違和感を覚えた。上手く言い表せない、けれどどこか不思議な、もやもやする感じだ。

「……礼を言う。ありがとう、お陰で助かった」

「いえいえ、怪我もないようですし、よかったです」

少女は微笑む。あの時私の目に映ったのは大人だと思っていたのだが、勘違いだろう。霞んでよく見えなかったのだ、誤認しても仕方はない。

「君が助けてくれなかったら、春先に死体で発見されるところだった」

「はは、と笑ってみる。少女は「笑い事ではありませんけどね」と苦笑いを返してくれた。

「……ところで、ここは？」

立ち上がって障子を開けてみる。月の光に照らされ、銀色に光る雪景色が私を迎えた。幻想的な美しい景色だと心から思う。だが、視界には他の建物はない。ここが山の上にあることもわかった。

「ここは　　この村には、もう名前がありません」

障子を閉め、少女の前に腰を下ろす。名前がない？

「昔は、白鶴村、と呼ばれていました」

白鶴村。ということは

「……運命、というものを信じたくなるね」

私の目的地じゃないか。なんの偶然だろうか。神様に感謝してみたくなるものだ。

「……どういうことですか？」

疑問符を浮かべる少女に、私は私の目的のことを説明した。

白鶴村、というのは、四年前に地図上から姿を消した村だった。

六年前、ダム建設の話があがり、この村の住民は立ち退きを要求された。もちろん最初は反対し、抵抗したらしいが、一年後には断念し、ほとんど全員が移住していったという。しかし、近年の異常気象により、冬の山の平均気温は著しく低下、結局ダム建設は二年前に白紙に戻されたそうだが、そんな村に帰ってくる者もおらず、廃村として僅かな者が認知している程度だという。

そんな村の付近で、雪女が目撃されるようになったのは、十日ほど前だった。友人の登山家が、たまたま目撃したという。それまでも、たまにそういった類の目撃情報があったという。私もこうしてやって来たのだった。

「そうでしたか……」

なるほど私も雪女と錯覚したのだ、この少女を見たのかもしれな

いや、待て。

「この村に、四、五十歳くらいの女性はいないか？」

友人の目撃談はこういうものだった。

雪山登山のためにこの山を訪れていたとき、下山途中、六分目くらのところで白い着物に見を包んだ、四、五十歳の女性の後姿を見た。吹雪の中、平然と歩いており、まるで雪女のような姿を見た。雪女が振り向き、一瞬だけ顔が見えたので、年齢の特定が大雑把ながらできたが、殺されてはたまらないと逃げるように下山したのだという。

「……この村に、私以外の人間はおりません」

少女はまっすぐ私を見つめて答える。

「本当に？」

疑うわけではなく、確認のために少女を見つめて問う。

「本当です」

少女は引くでもなく、むしろ堂々と、まっすぐと私の目を見つめて答えた。

なら、本当なのだろう。経験が浅いとはいえ、仮にもジャーナリストだ、大きな嘘の匂いをかぎつけるくらいはできるが、この少女からはまったく感じられない。

「……あの、これって取材なんですか」

少女が尋ねる。

「あ、答えたくないことだったら断ってくれて構わない。強制する権利なんてないから。でも、できれば答えて欲しい」

「……わかりました」

命の恩人だというのに、私はかなり悪い態度を取っているな、と自覚する。けれど、そういう度胸は仕事の上で必要なのだ。

「……そうだな。じゃあ、この村に伝説とか」

「あの」

私の質問を、少女が遮った。

「……知ってること、全部お話しします。代わりに……私のお願い事をひとつ、聞いてはいただけませんか？」

少女の頬の透き通った肌色に、少しだけ赤みが差す。

「命を助けてもらったんだ、私にできることなら二つでも三つでも

聞くよ」

「いえ、一つでいいんです。一つだけ、そう難しいことではないのです。それを、聞いていただきたいのです」

懇願する少女の顔は、今にも泣きそうで、すごく恥ずかしそうで、滑稽とも思えた。けれど、それだけ聞いて欲しい願いがあるのだから。

「……わかった。約束するよ」

私が言っただけで微笑むと、少女は赤くした顔のまま、すごく嬉しそうに微笑んだ。

「あ、ちよつといい？」

カメラを取り出して、少女に向ける。ポーズとかは取らせず、自然な姿を一枚、写真に収めた。

「先にお願いを聞こうか？ それとも話の後にしようか」

「あ、はい、先にお話します。ただ、信じていただけるかどうかはわかりません」

信じるかどうか、って……ありえなさそうな伝承が真実だ、とかそういうことを言うのだろうか、と思っただけ。

「その友人さんが目撃なさった雪女、私です」

いきなり核心だった。

「……申し訳ない。詳しい説明を頼む」

「はい。自己紹介も兼ねて説明させていただきます……けど、その前に」

少女はすっと立ち上がって言った。

「移動しましょう。ここでものを書くのは大変でしょうし、お茶もないですから」

「まず、この村の伝説をお話します。この辺りは元々、今ほど寒く

なるような場所ではなかったことを加味してお聞きください」
暖かいお茶を一口飲み、少女は話を始めた。

江戸時代、この辺りでは麦を作っていたそうです。

しかし、年々収穫量は減り、重税が負担となり、さらには飢饉が起こり、一人、また一人と人が餓え死んでいきました。

そんなとき、一人の老婆が村に迷い込んできたそうです。

老婆は餓え痩せ細り、けれどもどの村も食料が足りておらず、とても他人に分け与えることなどできませんでした。

しかし、この村人たちは、皆で少しずつ食料を老婆に分け与えたそうです。

老婆はそれを食べ、村人の優しさに感涙しました。

そして、礼にと知恵を分け与えたのです。

村人たちは、老婆が授けた知恵を活かし、耕作に励みました。

翌年以降、村人たちが餓えることはなくなったそうです。

よくあるような話ではある。自分が苦しんでいても、他人を助ける精神を持つことは大切だと、私も思う。

「……で、この伝説と雪女 君にどんな関係が？」

「その老婆が私です」

スパツと結論が出た。

「……えーっと」

少女が言った、「信じてもらえるかどうか」という意味を、はっきりと理解した。

「自己紹介をしましょう」

疑問符を浮かべている私に、少女は微笑んで自己紹介をした。

「私は雪と申します。生まれは江戸、四百年ほど生きております」

容易には信じられない。ただの頭のイカれた女の子という風にも

「考える。目の前の、どう見たって年下の少女が、四百年も生きてるだど？」

「信じて、は……いらっしやらないようですね」

「そりゃあ簡単にはな……」

「けれど、少女の瞳に嘘の色はない。本当のことを言っているのか、それとも本当だと信じ込んでいるのか。もし、本当だとしたら。」

「……私は敬語を使うべきか？」

「ふふ、結構ですよ。そちらのほうが話しやすいでしょう」

「……少々気が引けるが、この話し方のままにさせてもらうことにしよう。少女は続ける。」

「ヤオビクニ、ってわかりますか？」

「聞いたことのない言葉だ。」

「八百比丘尼、というのは、人魚の肉を食べて寿命を延ばした人間のことです」

「つまり、少女　　雪は、江戸時代に人魚の肉を食べたというのか。」

「当時は七十歳くらいでしたか。人魚の肉だ、と言われ將軍様に献上された肉の、毒見役に抜擢されたのです」

「それが本物で、君は八百比丘尼になってしまった、ということか……」

「はい。間抜けなことに、本当に寿命が延びてるのかどうかを、また本当に毒がなかったのかどうかを確認するために数日様子を見られていたのですが、その間に人魚の肉には蛆が湧き、とても食べれるものではなくなってしまったそうです」

「おいおい、本当に馬鹿な話だな。」

「こんな話をしたところでそれが本当だ、などと信じていただけとは思ってはおりません。本題はここからです」

「雪はお茶を一口飲み、話を続けた。」

「およそ四百年間、私は生き続けました。老いることも、死ぬこともなく、ただ生きていたのです。しかし私は、厳密には不老不死、

というわけではないのです」

少しだけ、雪がどのような気持ちで時間を過ごしたかを想像した。老いた身体のまま、死ぬこともできず、ただ他人には先立たれ、その都度その悲しみを乗り越えて。

きつと、地獄のような いや、まさに地獄そのものだったのだらう。

「どんな薬にも薬効の限界があります。それがあってこそその薬、ではありますが、人魚の肉も一種の薬と呼べるものなのです。人間

いいえ、それを食べた者の寿命を延ばす、薬なのです。つまり、寿命が延びるだけで、いつか死ぬことに変わりはないのです」

それは、自然の摂理だ。生ある者、全てが死に還る。

私はお茶をすすり、話の続きに耳を傾ける。

「そして、ここからがあなたが聞きたがっていることです」

雪は一旦間を置いて、少しだけいい辛そうに続きを話した。

「私は、あと三日ほどでこの世を去ります」

いきなりの、宣言だった。

「……どういうことだ？」

「強い薬には副作用があるものです。人魚の肉もまた、副作用のよくなものがあるのです」

答えになってない。寿命が延びる、しかしそれにも限界がある。

ここまでではわかる。しかし、なぜそんなに具体的な日数が出るのか。「人魚の肉は、科学的なものであるよりも、呪術的なものであるのです。寿命が延びる、とは言いますが、強制的に細胞を活性化などをさせる、というわけではなく、単純に『身体の時間を緩やかに逆にする』というのが正しいと、私は思っています」

「緩やかに逆に？」

「ええ。しかし身体にも時間の影響があります。時間を巻き戻しつつ、時間を進めていくとすると この時点で矛盾してそうな話

ですね。数学のプラスとマイナスのような話になります。結局はプラスの方が影響が強いのですが、普通の人よりはプラスが小さい。結果的に、寿命が延びるといっわけです」

面倒な話だ。しかし、言っていることは理解できる。

「ではそれを踏まえて、先ほどの副作用の話に戻りましょう。人魚の肉の副作用はなんだと思いますか？」

「もったいぶらないでくれ。結論を話してくれるとわかりやすく助かる」

私の言葉に、雪は「せっかちですね」と苦笑した。

「副作用は強すぎる効き目があるから起こるものですよ。人魚の肉の効能がもし私の言った通りだとしたら、想像ができるのではないでしょうか」

言われて気づいた。至極簡単なことだ。

「時間が戻りすぎているのか」

「そういうことです。恐らく、人魚の肉が与える影響というのは戻すだけではないのでしよう。進める力と戻す力があって、進める力が先に切れた結果、戻る力が強くなってしまった。その結果、私は

「

雪は自分の胸に手を置き、瞳に悲しみの色を混ぜて小さく言った。

「一日に、四歳若返るのです」

今の雪を十四歳としよう。十日前には五十四歳。なるほど確かに、友人の目撃情報と矛盾しない。

「日付が変わると同時に一つ、若返ります。朝日が見え始める頃に、また一つ。日が昇りきるあたりに、また一つ。日が沈む時に、また一つ。若返り、若返り、最後には

「心の底からの、悲しい色の瞳で。」

「細胞の一つも残らず、消えるでしょう」

雪は、呟くように言った。

雪の話は、そこで終わりだった。今の雪の瞳からは、純粋な悲しみの色しか窺えない。

私は、何を言えばいいのかわからなかった。四百年の間、雪の胸には何があったのだろうか。何を思って、生きていたのだろうか。死ぬことを悟り、受け入れているように。否、そのようにしか見えない相手に、なんと声を掛ければいいのか。人生経験が浅い

これは、彼女に比べれば誰にでも言えることではあるが私には、わからなかった。

「お話できることは、以上です。信じていただけているかどうかはわかりません」

信じられないことはない。彼女の瞳には、嘘の色はない。純粋な悲しみ。それも、地獄を味わい続けてきた人間にしか出せないような色が、それだけが満ちているからだ。だが、決定的ではない。

「あの、私の方はお話したのですから、お願いのほうを……」

一瞬で悲しみの色を拭い去り、雪は恥ずかしそうにもじもじしながら言う。そういえばそんな条件で話を聞いたのだった。話が少しぶっ飛んでいたというか、そのせいで危うく忘れるところだった。「そのお願いってのは？」

「えつとですね……あの……その……」

俯いてもじもじしながら、ごにごにょごにょと言う雪。さっきまでの堂々とした喋りっぷりは、どこへ行ってしまったやら。

「あの、いい……ですか？」

やっと決心がついたのか、顔を上げて確認してきた。私は黙って頷く。

「……わ、私と一緒に……三日間だけ、三日間だけこの村で過ごしてほしいのです」

……要するに。

「最後の時間は誰かと一緒に居たい、ってことか」

私が言うと、雪は顔を真っ赤にして固まる。四百年生きていたとしても、ほとんど老婆の姿だったんだし、恋愛経験が豊富だった、ということではなさそうだ。少し面白いと思った。

「私なんかでよければ」

私は特に考えもせずそう言った。他人の死を看取ることになるとはいえ、元々願いを聞くといい条件で話しをさせたのだ。その上相手は命の恩人、断れるはずもない。

「あつ、ああありがとうございますっ」

雪は花のような笑顔を咲かせる。

私は　その恩人になにもしてやれないことに、少しだけ悔しさを感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4529o/>

Dialy

2010年10月22日20時10分発行